院政・鎌倉時代における四段活用動詞「アフ」の用字法について

刀田　絵美子

1　研究の目的と方法

現代語表記を内省しても分かる通り、日本語の表記法は一様でない。現代語表記の場合は、漢字・平仮名・片仮名・ローマ字のいずれで表記するかを選択することが、語の意味内容に関与していく。語によっては、どの漢字を用いるかという選択がそこに加わる場合がある。また、どのような場面で用いられるかということも、表記の選択に関与している。

使用する文字の種類の多少はあるにせよ、日本語文の書記が始まった当初からこうした選択が行われ、それを積み重ねることで、日本語文は形成された。それらを検討することで、どのような用字法に基づいて語の表記が行われたかという研究が進められている。

院政・鎌倉時代の表記については、品詞に着目したり、語に着目した研究が行われてきた。[*1] 本稿で取り上げる四段活用動詞「アフ」[*2]についても、磯貝淳一氏のご研究がある。[*3]

本稿の筆者も、鈴鹿本「今昔物語集」や平家物語諸本などの個別資料における四段活用動詞「アフ」の用字法を検討してきた。[*4] その結果、一資料中であっても、表記と意味用法が、いちいち対応していないという結論を得た。

本稿では、調査の範囲を院政・鎌倉時代[*5]に書写された資料に拡げ、仮名表記例を含め、[*6] 四段活用動詞「アフ」に用いられる表記を調査し、表記と意味用法に、また表記とそれを使用する資料との間に、どのような相関性があるのかを検討する。そして、個別の資料に見られる特徴を超えて、院政・鎌倉時代における四段活用動詞「アフ」の用字法とはどのようなものであったかを明らかにする。

2　対象資料における四段活用動詞「アフ」の用字法について

2.1　調査資料

本項では、調査した資料、および、四段活用動詞「アフ」の用例のうちどのような例を考察対象としたか述べる。

まず、本稿で調査した資料を掲げる（書名は新字体に改めて、五十音順に掲載する）。

京都国立博物館蔵「打聞集」・梅沢本「栄花物語」・最明寺本「往生要集」・高野山西南院蔵「往生要集断簡」・高野山西南院蔵「和泉往来」・浄福寺本「仮名書き往生要集」・知恩院蔵本「仮名書き観無量寿経」・徳川美術館、五島美術館他蔵「源氏物語絵巻」・尊経閣文庫本「江談抄」・高山寺本「古往来」・東京国立博物館蔵「古今和歌集（元永本）」・東京国立博物館蔵「極楽願往生歌」・梅沢本「古本説話集」・鈴鹿本「今昔物語集」・真福寺本「三外往生伝」・中山法華経寺本「三教指帰注」・名古屋市博物館蔵「三宝絵」・観智院本「三宝絵詞」・真福寺本「拾遺往生伝」・高山寺本「十无尽院舎利講式」・真福寺本「将門記」・真福寺本「続本朝往生伝」・専修寺蔵「選択本願念仏集延書」・観智院本「注好撰」・尊経閣文庫蔵「日本往生極楽記」・金沢文庫本「仏教説話集」・宮内庁書陵部蔵「宝物集」・法隆寺蔵「法華百座聞書抄」・真福寺本「本朝新修往生伝」・久遠寺本「本朝文粋」・東洋文庫蔵「明恵上人歌集」

次に、考察対象とした用例の条件について述べる。

本稿では、四段活用動詞「アフ」の用例のうち、一文中で〈逢会〉〈遇機〉〈合致〉などの意味用法として使用される本動詞例を考察の対象とし、複合語の前・後部要素として使用される例は除外した。また訓点資料においては、四段活用動詞「アフ」の活用形が付訓されている例のみを考察の対象とした。ただし、当該字に訓点がない場合でも、訓読したときに与格を上接する例や、他に「アフ」と付訓する類例が存在する場合は、考察の対象とした。他に「アフ」と付訓する例がある漢字でも、当該例において別の和語が付されていたり、漢語サ変動詞として訓読することが示されている例は除外した。具体的な用例は次項に掲げる。

2.2　漢字表記と意味用法の相関性についての検討

2.1で掲げた資料を調査してみると、漢字表記として「値」（一五二例）、「遇」（一三六例）、「逢」（六七例）、「會」（六五例）、「遭」（二五例）、「合」（二一例）、「相」（一一例）、「對」（四例）、「遘」（一例）が使用されていることが分かった。

本項では、漢字表記例の意味用法として複数の資料で用例が確認できる〈逢会〉〈遇機〉〈合致〉について、漢字表記と意味用法にどのような関係があるのかを検討する。

あ〈逢会〉

人・人以外の有生物・無生物を補語に取り、それらに出会いあたることを意味する用例をこれに分類した。本稿で取り上げた資料では、「値」「遇」「逢」「會」「合」「遭」「相」「對」が使用されている。以下、用例を示す。[*7]

①夫　海ノ岸ニ行テ彼ノ猿ニ値テ云フ（今昔物語集・巻五）
②其ノ手ノ主ニ合ハムト思フ（今昔物語集・巻一〇）
③山ノ中ニ行人有リ　尋テ是ニ會ヌ（三宝絵詞・上）
④此ノ和尚ニ對ニ天竺ヨリ渡僧聞テ申（打聞集）
⑤僧侶纔五六人・適遇洛陽中（本朝文粋・巻一〇・詩序）
⑥適値友人相語曰（本朝新修往生伝）
⑦サテ　此經ヲ貴テ　鬼相テ讀カケ給ナリケリ（打聞集）
⑧覚大師　合破滅之使（打聞集）
⑨是即持戒比丘也道逢賊（注好撰）
⑩男女ノ家ニ行テ會ニケリ（今昔物語集・巻二九）
⑪伉儷云ハ男ヤモメ女ヤモメ二人相テトツキセサル不思議ノ事也（三教指帰注）
⑫即密ニ遭テ傍男ニ自送ル年序ヲ（注好撰）
⑬僧祇律云昔有烏合キ一ノ雉交通シテ令ム生子ヲ（注好撰）
⑭蓮華色カ戯ニ尼ノ衣ヲ服ケルハ其力ニ今佛ニ奉遇レリ（三宝絵詞・上）
⑮今日乃至値我得道（仏教説話集）

まず、①から④は動作主が意志的に逢会する用例である。資料によって使用される漢字表記が異なる。同一の資料であっても、①②のように用いられる表記が異なる。

⑤から⑨は動作主がたまたま逢会する用例である。現代語表記では、「遇」が主に用いられるが、本稿で取り上げた資料の中では、用例に示す通り、必ずしも「遇」が用いられるわけではなく、これについても、使用される漢字表記が異なる。

⑩から⑫は男女が逢会する（＝結婚する）用例である。現代語表記では「逢」を用いることがあるが、現代語表記と異なる表記を確認することができた。⑬はその類例で、「烏」（＝雄）と「雉」（＝雌）が逢会して子を成すという用例である。

⑭⑮は「仏」に逢会する用例である。本稿で取り上げた資料では、特に今昔物語集において仏と出会う場面で「値」を使用することが多いことが確認できた。[*8] これは仏縁のあるものに出会うことを示す「値遇」という語が想起されるためであろうか。ただし、他の例でも示す通り、「値」は「仏」に逢会する場合にのみ使用され

るわけではない。

い〈遇機〉

よい出来事や悪い出来事に遭遇する意味を表す場合や、「日」「時」などの時節のほか、「仏教」や「教法」などを補語に取る用例をこれに分類した。本稿で取り上げた資料では、「値」「遇」「逢」「會」「遭」「遘」[*9]が使用されている。〈逢会〉で使用される漢字表記と比較してみると、複数の資料で見られる表記のうち「相」「合」が〈遇機〉では用いられない。以下、用例を示す。

①幸遇淳化之年（サニアフテ）得（エタリハルコトヲ）賜　延齢之物（ヲ）。（本朝文粋・巻一一・詩序）

②其ノ灾ニ不預スシテ遂ニ大平ニ値テ冨貴ニ可至キ也（今昔物語集・巻七）

③人若シ急難ニ値ハム時ハ心ヲ静テ（今昔物語集・巻一二）

④悲キ死ノ尅ニ不會ナリヌル事（今昔物語集・巻二九）

⑤今此ノ苦シヒニ會ヌラム（三宝絵詞・上）

⑥我前生ニ何罪ヲ造テ今此大苦ニ遭ル（仏教説話集）

⑦或詣熊野山ニ逢洪水ニ得奇舟ニ（拾遺往生伝）

⑧今年遭洪水（コトシアヒニアフ）大旱（ニ）（本朝文粋・巻一三・願文）

⑨此中有屠牛（ノ）一販鶏（リホフリヲ）者（ヒサクヲ）逢（テ）善知識（ニ）一十念往生（セリ）（日本往生極楽記）

⑩臨終剋逢善知識僧（宝増）（続本朝往生伝）

⑪臨終之時値善知識讃歎佛徳助往生儀（新修本朝往生伝）

⑫此日遇善知識念弥陀（新修本朝往生伝）

⑬亦値仏教（ニ）猶（シコトシ）一眼亀値（ノ）浮木孔（アヘラムカウキノアナニ）（往生要集）[*10]

⑭縦具（アルトヒセルトモ）諸根遇仏教（ヲフコトニ）亦難（シ）縦遇（ヒレトトモ）仏教生（ニナスコト）信心（ヲ）亦難（シ）（往生要集）

まず、①②はよい時節に遭遇する用例である。③④は②と同じ資料で、悪い出来事・時節に遭遇する用例である。②③には同じ漢字表記が用いられていることから、出来事に対する好悪と漢字表記が対応していないことが分かる。

つぎに、⑤⑥は「苦」に、⑦⑧は「洪水」に遭遇する例である。各例で示す通り、資料によって漢字表記が異なっており、遭遇する対象と漢字表記が対応していないことが分かる。

最後に、⑨から⑭についてである。〈逢会〉の用例の中で、仏縁のあるものに出会う場合に「値遇」が想起されることで「値」が用いられるのではないかと述べた。〈遇機〉のなかにも、「善知識」「仏教」など、仏教に関わるものと遭遇する用例があり、その場合に「値」を用いることがある。しかし、⑩のように別の漢字表記を用いる資料もあることから[*11]、仏教的な文脈と「値」が完全に結びついているわけではないということが分かる。また、⑪⑫と⑬⑭で示すように、同一の資料において同一の対象に遭遇するからといって、

同じ漢字表記を用いるわけではないようである。

㋒〈合致〉

複数のものが一つにあわさることを意味する用例をこれに分類した。本稿で取り上げた資料では、〈逢会〉〈遇機〉と比べ、用例が少なく、すべての例で「合」が使用されている。特に日本漢文で書記された資料のうち、「合」が用いられる資料（拾遺往生伝・本朝文粋・往生要集・古往来）では、全例が〈合致〉の用法であった。①から④に示す用例である。

①夫交（レマシハリ）者無隔（シツルこと）一古今一（を）不限老少一（を）志合（のアフトキンハ）則千載早暮（ナリ）（本朝文粋・巻一〇・詩序）

②悪鳥（中略）放之如石墜（ハナチ）地砕（ヨクシテ）為百分（ノツルヲツチニ）砕已（ケテナス）複合（トケハテ）（アヒス）（往生要集）

③壇越（ヲモヒミルニ）以為（ヲモヒミルニ）此言与夢合矣（拾遺往生伝）

④是則口付（クチツキノ）下人（シモヒト）五加一誡（イマシメヲ）之間置（ニヲイテ）五不合一（サルアハヲ）較三（古往来）

⑤蘇規カ半鏡ニ合フ事沙ノ如シ（今昔物語集・巻一〇）

⑥半鏡飛蘇規所来而合（カニテ）（コト）如約（ノ）矣（注好撰）

⑤⑥は、今昔物語集と注好撰の同文箇所である。①から④で挙げた資料とは異なり、両資料では〈逢会〉の用法に「合」が使用される例（今昔物語集については〈逢会〉②、注好撰については〈逢会〉⑬で示す）がある。また、「合」で〈逢会〉である例は打聞集にも存する〈逢会〉⑧で示す）。このように見てくると、全ての「合」が〈合致〉の用法と結びついているわけではない、ということが分かる。[*12]

以上、本稿で取り上げた資料に見られる〈逢会〉〈遇機〉〈合致〉について、用例と意味用法を確認した。

〈逢会〉では、「値」「遇」「逢」「會」「合」「遭」「相」「對」が用いられ、〈遇機〉では、「値」「遇」「逢」「會」「遭」「遘」が用いられる。複数の資料で使用される漢字表記は、〈逢会〉の用法で使用される漢字表記の方が種類が多いが、どちらの用法も、漢字表記との間に明確な相関性が見出せない。〈合致〉は、全例が「合」であるが、資料によっては「合」を他の用法で用いる例もあった。そのため、〈合致〉についても「合」で表記するという原則を有する資料も存するが（特に日本漢文で書記された資料でその傾向が認められる）、現代語表記のような明確な用字法が見出せないことが分かった。

2.3 第一位表記と資料の相関性についての検討

前項で示したように、本稿で取り上げた資料では、四段活用動詞「アフ」の漢字表記と意味用法に密接な対応関係が認められないようである。

では、院政・鎌倉時代の四段活用動詞「アフ」に用いられる表記とそれを用いる資料にはどのような関係があるのだろうか。各資料において最も多用される表記（以下、これを第一位表記という）の観点から考えてみる。

本稿で取り上げた資料の中で使用されていた漢字は、用例数の多い順に、「値」「遇」「逢」「會」「遭」「合」「相」「對」「遘」であった。本稿では、さらに片仮名と平仮名を加えて考察する。

まず、本稿で取り上げた全ての資料を第一位表記ごとに整理し、「アフ」全例に占める第一位表記の割合が高い順に並べてみよう。なお、観智院本「三宝絵詞」については、上巻と中・下巻で表記形式が異なるため、両者を区別する。

【表】対象資料における四段活用動詞「アフ」の表記

資料＼表記	値	遇	逢	會	遭	合	相	對	遘	片仮名	平仮名	合計
「値」が第一位表記												
イ 今昔物語集	119	13	1	52	1	10	1			1		198
ロ 十无尽院舎利講式	4	2										6
ハ 仏教説話集	6	1		1	2					2		12
「遇」が第一位表記												
ニ 三外往生伝		1										1
ホ 江談抄		1										1
ヘ 拾遺往生伝	2	11	2		1	2						18

資料＼表記	遇	逢	會	遭	合	相	對	遘	片仮名	平仮名	合計
「遇」が第一位表記											
ト 日本往生極楽記											
チ 本朝文粋	4										
リ 本朝新修往生伝	7	10	2								
ヌ 和泉往来	1	1									
ル 往生要集	7	10	3								
ヲ 古往来		2	2								
ワ 将門記		4	3								
「逢」が第一位表記											
カ 続本朝往生伝			3								
ヨ 注好撰	1	3	11								
「會」が第一位表記											
タ 三宝絵詞・上巻	1	1	2								
片仮名が第一位表記											
レ 法華百座聞書抄											
ソ 選択本願念仏集延書											
ツ 明恵上人歌集											
ネ 極楽願往生歌											
ナ 三宝絵詞 中・下巻		2									
平仮名が第一位表記											
ラ 栄花物語											
ム 宝物集											
ウ 仮名書き往生要集											
合計	9	6	1								

総計	二種類の表記が同数ある		平仮名が第一位表記					
	フ 打聞集	ケ 三教指帰注	マ 古本説話集	ヤ 古今和歌集（元永本）	ク 源氏物語絵巻	オ 往生要集断簡	ノ 仮名書き観無量寿経	キ 三宝絵
152								
136			1	3				
67				3				
65		1						
25			1					
21	1							
11	4	2						
4	4							
1								
52	3	2						
186			21	73	2	3	6	8
720	12	5	23	79	2	3	6	8

【表】より、本稿で取り上げた資料は、「値」が第一位表記の資料、「遇」が第一位表記の資料、「逢」が第一位表記の資料、「會」が第一位表記の資料、片仮名が第一位表記の資料、平仮名が第一位表記の資料、二種類の表記が同数用いられる資料[*13]に分類できる。そして、「遭」「合」「遘」は、複数の漢字を表記に使用する資料で用いられることはあっても、一資料中で第一位表記として使用されないことが分かった。[*14]

では、表記とそれを第一位表記とする資料にはどのような関係があるのだろうか。以下、（i）「値」、（ii）「遇」、（iii）「逢」、（iv）「會」、（v）片仮名、（vi）平仮名について、各表記が第一位表記である資料の特徴を表記体と内容の観点から検討する。

（i）「値」が第一位表記である資料について

【表】中、イ・ロ・ハがこれに該当する。イ・ハは漢字片仮名交じり宣命体で書記されている。またロは日本漢文で書記された講式である。これらがどのような人物の手によるものであるかはともかく、内容的には仏教関係の資料とまとめることができる。[*15]

【表】から分かる通り、イは「値」を用いる場合が、他に比べて多く、集の全体に亘って「値」が使用されている。これは、依拠資料の表記を踏襲したものなのだろうか。先行研究に従ってイの依拠資料を仮定し、同時代に書写された資料や大蔵経の本文と比較してみる。

まず、依拠資料が確認できる八九例のうち、依拠資料でも「値」で表記される例が一三例（巻二が一一例、巻一二が二例）であった。また、依拠資料で「値遇」と表記される例が二例、「値遭」と表記される例が四例であった。

一方で、「アフ」と訓読しうる別の表記が用いられている箇所は一六例（「遇」が九例、「逢」が五例、「遭」が二例）であった。これらについては、イの編著者によって、表記が「値」に改められた可能性を指摘できる。また五四例については、依拠資料に「アフ」と訓読しうる表現を確認することができなかった。これらの箇所に

ついては、改変されたり増補されたりしたと考えられる部分である。

右をまとめると、イにおいて、「値」の表記を依拠資料からそのまま踏襲している箇所は、全体の一五パーセント（熟語を含めても二一パーセント）程度で、その他の箇所は別表記が使用されていたり、依拠資料に該当表現がない箇所で使用されており、特に依拠資料の表現を踏襲したために、「値」が多用されるわけではないということができる。

（ii）「遇」が第一位表記である資料について

【表】中、ニからワがこれに該当する。つまり、今回調査した資料の中ではロ・カ・ヨ以外の日本漢文資料がこれに該当している。

【表】から分かるように、ニからワは他の表記も併用している。しかし、表記と意味用法の区別が対応しているわけではないことは、2.2で示した通りである。

これらのことから、意味用法の区別と表記の区別が結びついて、ニからワにおいて、たまたま「遇」が第一位表記になったのではないことが分かる。

（iii）「逢」が第一位表記である資料について

【表】中、カ・ヨがこれに該当する。どちらも日本漢文で書記された資料である。これらも、「遇」と同様、一資料中で他の表記を併用する。しかし、表記と意味用法の区別が対応しているわけではないことから、文脈に依ったために「逢」が第一位表記になったわけではないことが分かる。

日本漢文で書記された資料に、「遇」が第一位表記の資料と、「逢」が第一位表記の資料があるのはなぜだろうか。本稿の筆者は、右に応えるための明確な仮説を得ていないが、日本漢文で書記された資料の中で、「逢」を用いる資料よりも「遇」を用いる資料の方が多いということについては、（注2）に掲げた色葉字類抄（三巻本）において、「遇」の方が掲出順位が高いことと関係するのかもしれない。調査対象を拡げて検討する必要がある。

（iv）「會」が第一位表記である資料について

【表】中、タがこれに該当する。タは漢字片仮名交じり宣命体で書記された資料である。ただし、「アフ」五例中、「會」は二例のみで、「値」「遇」「相」が一例ずつ用例の存する。したがって、タにおいて、「會」が第一位表記であるといっても、第二位表記との差が小さく、むしろ、漢字表記と仮名表記を比べて、漢字表記が優勢だと捉えた方がよいかもしれない。

本稿で取り上げた資料の中で、「會」を用いる資料を見てみると、イでの使用が多いことが分かる。イでは、「値」と同様に集全体に亘って「會」が分布している。またイの他にも、八資料（ハ・レ・ト・チ・ル・ワ・カ・ヨ）で用例が確認できる。これらは、漢字片

仮名交じり宣命体および日本漢文で書記された資料である。これらにおいては、「會」は第二以下の表記として使用されており、現代語表記のように「アフ」の代表的な表記として使用されているとはいえない。

（ⅴ）片仮名が第一位表記である資料について

【表】中、レからナがこれに該当する。当然のことながら、全て片仮名文で書記されている。本稿で取り上げた資料では、イ・ハ・タも片仮名で書記されていた。これらは、宣命体で書記されており、漢字表記が第一位表記であることは、すでに述べた。これに対して、（ⅴ）に分類される資料は漢字と仮名の大きさに大差がなく、漢字に対して片仮名の量が多い印象を受ける資料群である。

ここに分類される資料の特徴を内容の観点から検討してみると、まずツ・ネが和歌であることが挙げられる。和歌の表記は、「値」が第一表記であったイでも仮名表記される。また平仮名文のヤでも仮名表記される。

つぎに、レは説教の聞書を抄写したもの、ソは仏教書の延書（＝もともと漢文で書記されたものを訓読した資料）、ナは仏教入門書である。これらは仏教を広めるために、初学者向けに作成された資料だとまとめることができよう。

なお、ナは「遇」で表記する例が二例ある。次の例である。

①就智満禅師遂出家遇弘景律師（巻下　16裏3）

②最三蔵度人授戒遇四万有余（巻下　16裏3）

どちらも、日本漢文で書記された鑑真に関する注釈である。本文の横に小書きされている。（ⅱ）で述べたように、院政・鎌倉時代に書写された日本漢文には、「アフ」を「遇」で表記する資料が多い。このこととナの注で「遇」が用いられていることは、関連があるのかもしれない。ナの漢字表記については、例外として右のように考えることができる。本文の表記に着目してみると、ナでは「アフ」全例が仮名で表記されているため、（ⅴ）に分類した。

（ⅵ）平仮名が第一位表記である資料について

【表】中、ラからマ、すなわち、本稿で取り上げた全ての平仮名文がこれに該当する。

ヤ・マについては、漢字表記する場合もある。それぞれについて例を示す。

まず、ヤで漢字表記する用例を全て示す。

①毎年に遇とはすれ（と）織女のぬるよのかすそす（く）な雁ける（巻四　197）

②今夜こむ人には遇し織女のひさしき程にあえも去年すれ（巻四　181）

③かくしつ、とにもかくにもなからへて君か八十ちに遇由も鉋

（巻七　347）

④したの帯のみちは方々別る□（と）も行めくりても逢とそ思（巻八　405）

⑤わすれ草たねとらましを逢事の糸かくかたき物としりやは（巻一五　765）

⑥老らくの來と知せは門・て無と答て逢さら猿子尾（巻一七　895）

ヤでは、「アフ」七十九例中、「逢」「遇」が三例ずつ使用されている。全ての例が和歌で使用されており、平仮名で他の表記する例と、①から⑥に意味上の相違は見出せない。

次に、マで漢字表記する用例を全て示す。

⑦道信中将遭父（巻上・目次）

⑧西三條殿若君遇百鬼夜行（巻下・目次）

マでは、巻頭にある目次の「アフ」で漢字が使用されている。目次は日本漢文で書かれている。一方、本文の「アフ」は全て平仮名である。このことから、マでは、目次と本文の差、すなわち、日本漢文と平仮名文の差が「アフ」の表記に影響していると考えられる。

以上、本稿で取り上げた資料に見られる表記とそれを第一位表記とする資料の関係について、表記体と内容の観点から検討した。

その結果、どのような表記体で書記された、どのような内容の資料かということが、どの表記を第一位の表記とするかということと（書記者の意識の有無はさておき）関係があるのではないかという仮説を示した。表記ごとに特徴をまとめると、左の通りである。

「値」― 漢字片仮名交じり宣命体および日本漢文で書記された仏教関係の資料で第一位表記として使用される

「遇」「逢」― 日本漢文で第一位表記として使用される

片仮名― 片仮名文で書記された、初学者向けの仏教書および和歌で第一位表記として使用される

平仮名― 平仮名文で書記された資料で第一位表記として使用される

「會」「遭」「合」「相」― 漢字片仮名交じり宣命体および日本漢文で第二位以下の表記として使用される

「對」「遘」― 本稿で取り上げた資料では、それぞれ一資料中でのみ使用されており、実態が明らかでない

3　研究の成果と今後の課題

本稿では、四段活用動詞「アフ」の表記について、院政・鎌倉時代に書写された資料を調査し、仮名表記のほか、漢字表記として「値」「遇」「逢」「會」「遭」「合」「相」「對」「遘」が使用されてい

ることを確認した。そして、これらにはどのような用字法が認められるかを二つの観点から検討した。

まず、漢字表記が意味用法とどのように対応しているのかを検討した。その結果、本稿で取り上げた資料では、「値」は〈逢会〉〈遇機〉として、「遇」は〈逢会〉〈遇機〉として、「逢」は〈逢会〉〈遇機〉として、「會」は〈逢会〉〈遇機〉として、「遭」は〈逢会〉〈遇機〉として、「合」は〈逢会〉〈合致〉として、「相」は〈逢会〉として、「對」は〈逢会〉として、「遘」は〈遇機〉として用いられていることが分かった。「相」「對」「遘」は、漢字表記と意味用法が対応しているように見えるが、これは本稿で取り上げた資料のなかにこれらの漢字表記の用例が少なかったことと関係があるかもしれず、これらについては課題が残る。

本稿で取り上げた資料では、「値」が〈逢会〉〈遇機〉の用法において仏教的な文脈で用いられたり、〈合致〉の用法にはすべて「合」が用いられたりする一方、「値」「合」の中にこれに該当しない用例がある。また、出会う（遭遇する）ことの偶然性や、出会う（遭遇する）対象への好悪によって、特定の漢字表記が用いられることはないようである。このことから、現代語表記のように、表記と意味用法が同時代人の共有知として存在しているわけではなく、資料によって用字法に揺れがあることが分かった。

そこで個別の資料に見られる特性を越えた、院政・鎌倉時代の用字法を探るため、表記とそれを第一位表記とする資料にどのような関係があるのか、ということを検討した。その結果を表記体ごとに述べるならば、漢字と平仮名で書記された資料は、本稿で取り上げた資料のすべてで平仮名表記が優勢で、日本漢文で書記された資料には、「遇」が優勢な資料と、「逢」が優勢な資料があることが分かった。漢字と片仮名で書記された資料は、宣命体で書記された資料では漢字表記が優勢で、漢字と仮名が同じ大きさで書記された資料では仮名表記が優勢であった。表記体に共通して優勢な表記があるわけではない、という点が表記体としての特徴である。

このような表記体ごとの特徴は、四段活用動詞「アフ」にのみ見られるものなのであろうか。この問題については、本稿で行ったような、書写年代に着目した資料の精選に基づく検討を通して、取り組んでいく必要がある。今後の課題としたい。

【注】

＊1　峰岸　明『平安時代古記録の国語学的研究』（東京大学出版会　一九八六年）では、古記録の表記や今昔物語集における副詞の表記について、佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』（明治書院　一九八四年）では、今昔物語集の形容詞の表記についてまとめられた。また、深野浩史『同訓異字使用史の研究　中古・中世を中心に』（笠間書院　二〇〇九年）では、「儒家編著文献（本朝文粋・説話集・往生伝）」「仏家編著文献（説話・験記）」「平家物語・太平記」における副詞四語の表記についてまとめられた。

＊2　「色葉字類抄」（前田家本　巻下　阿辞字）には、次のようにある。

〈會（戸外反）〉〈遇（牛具反）〉相〈（息資反）〉〈逢（符容反）〉値〈（直吏反）〉對　觀〈遭（—喪）〉〈遇（三十六字省略）〉侑（已上會也）

＊3　磯貝淳一「和化漢文における「アフ」の用字について—和漢混淆文との比較から」（新潟大学教育人間科学部国語国文学会『新大国語』第二九号　二〇〇三年）では、平安・鎌倉時代に成立した和化漢文資料を研究の対象とし、表記と用法との関係について、「逢—逢会　遇—逢会・遇機　値—逢会・遇機　合—逢会・合致　会—逢会　遭—遇機」と整理された。また、「和化漢文と和漢混淆文共に「値」「合」「会」「相」「逢」「遇」「遭」という七種類の表記のバリエーションを持ちながらも、資料によって選択の幅（用字の種類）が異なる」る（一三九頁）とまとめられた。本稿で取り上げる資料は、磯貝（二〇〇三）と重複するものもあるが、対象とした資料を院政・鎌倉時代に書写された資料に限定した上で調査資料を増やし、新たな観点から分析したため、公表する次第である。

＊4　拙稿「鈴鹿本『今昔物語集』における「アフ」を表す漢字の用法について」（広島大学国語教育会『国語教育研究』第五〇号　二〇〇九年）、同「平家物語諸本における四段活用動詞「アフ」の用字について」（訓点語学会『訓点語と訓点資料』第一二四輯　二〇一〇年）

＊5　本稿では、先学に従って応徳三（一〇八六）年から建久二（一一九一）年の間を院政時代、建久三年から建武二（一三三五）年の間を鎌倉時代とし、この期間に書写された資料を研究の対象とした。院政・鎌倉時代に成立した資料であっても、院政・鎌倉時代に書写された資料が残っていない場合は、研究の対象から除外した。

＊6　院政・鎌倉時代に書写された資料には、一資料中に「アフ」を漢字表記する場合と仮名表記する場合がある。また、「アフ」の仮名表記例しかない資料もある。仮名表記例を除外すると、院政・鎌倉時代において、「アフ」がどのように表記されたか、という問いに対して、漢字表記による側面について応えるに留まると考えたため、仮名表記例についても考察することにした。

＊7　用例を引用するにあたり、考察対象とした用例には傍線を付した。また、「アフ」と訓読するもの以外は現行の新字体に改め、訓点はできる限り反映した（声点・合符は省略した）。宣命体で書かれた資料の用例も漢字と仮名を同じ大きさで示す。

＊8　地の文や会話文で「仏ニアフ」と表現される例と、釈迦自身が「我ニアフ」と発話する例（以下、併せて「仏ニアフ」「我ニアフ」表現という）を計上した（地蔵菩薩や仏像などは除外した）。用例を挙げた仏教説話集や、三宝絵詞（上巻）以外では、今昔物語集（巻二）で用例が確認できた。今昔物語集（巻二）で「仏ニアフ」「我ニアフ」表現に用いられる漢字は次のように分布している。

表記＼説話番号	値	遇	會
8	2		
9	3		
10	2		
11	1		
12	2		
13	2		
15	2		
17	2		
18	2		
19	1		
28	1		
30		3	1
31	1		
32	1		
36	2		
40	2		
計	26	3	1

右表より、「遇」「會」は、第三〇話でのみ使用されていることが分かる。用例を出現順に掲げると次の通りである。

・「（前略）我ニ會ヘル故ニ阿那含果ヲ得タル也」（会話（仏→阿難））

・「毘舎離ノ前世ニ何ナル福ヲ殖テ　仏ニ遇奉テ道ヲ得リ」（会話（阿難→仏））

・「生レム所ニハ豪貴ノ人ト生レテ常ニ母子ト成テ仏ニ遇奉テ道ヲ得ム」（老女と三二人による願）

・仏ニ遇奉ルニ依テ道ヲ事　如此シトナム語リ伝ヘタルトヤ（結語）

第三〇話では、「仏ニアフ」には「遇」に「奉」を後接し、「我ニアフ」には「會」を用いている。他の説話においては、「我ニアフ」には「値」を、「仏ニアフ」には「値」に「奉」を後接することで、釈迦への敬意を表している。このことから、今昔物語集の編著者は「仏ニアフ」「我ニアフ」表現について、「値」を用いる（かつ、「仏ニアフ」の場合は「奉」を後接することで、釈迦への敬意を表す）という基本的な方針を持ちつつも、第三〇話においては、「アフ」の表記を変えることで、両者を区別しようとしたのではないかと考えられる。

なお、「仏ニアフ」「我ニアフ」表現を依拠資料と比較してみると、「遇」二例と「會」が依拠資料で「値」となっており、「遇」の一例は依拠資料に同文的箇所がなかった。これに対して、「値」は依拠資料と表記が一致する例が一〇例（38.5パーセント）ある一方、依拠資料と表記が異なる例が五例（「遭値」三例、「遇」一例、「遭」一例）、依拠資料に同文箇所がない例が一一例であった。

これらのことから、「仏ニアフ」「我ニアフ」表現に見られる表記の選択は、依拠資料の影響によるのではなく、今昔物語集の編著者の意図が働いた結果であると考えられる。比較した本文に異同があるのではないかという問題も残るが、『大正新修大蔵経』本文では異同が確認できなかった。

＊9 「遘」は本朝文粋において「陰陽精遘（アヘル）二・萬象」（巻三・対策）の用例が一例あるのみである。

＊10 本稿で取り上げる往生要集の用例に付した訓点は、院政期末に加点したとされる墨書の訓点である。

＊11 ここで用例に挙げた続本朝往生伝では、「アフ」の表記として「逢」（三例）、「遭」（一例）、「會」（一例）が用いられ、「値」は用いられない。このような資料においては、仏教に関係するものと遭遇するときに、「値」以外の表記が用いられる。

＊12 刀田（二〇一〇）（前掲（注4））では、増補本系の平家物語諸本で、「合」が〈合致〉の用法に使用される一方、〈逢会〉〈遇機〉の用法としても使用されることを示した。また、増補本系のなかには「舞ノ袖モ拍子ニ相テ」（延慶本　三本）の例があり、〈合致〉の用法の場合に必ずしも「合」が使用されるわけではないことを示している（ただし、現段階で類例が見つかっていないため、例外的な用字である可能性も残っている）。

＊13 【表】中、ケ・フがこれに該当する。ケは「相」と片仮名で表記する例が、フは「相」と「對」が同数使用されている。「相」は、本稿で取り上げた資料の中では、六資料（イ・ワ・ヨ・タ・ケ・フ）で用例が確認できる。このうち、四資料（イ・タ・ケ・フ）は漢字と片仮名で書記された資料である。〈逢会〉の意味用法でのみ、用例が確認できるが、2.2で示したように他の漢字表記と同様に用いられており、特定の意味が付与されているわけではない。「相」を使用する資料が少なく、使用したとしても用例数が少ないため、「相」とそれを使用する資料がどのような関係にあるのか不明である。今後の課題とする。

＊14 「合」は、増補本系の平家物語諸本で第一位の漢字表記であることが明らかになっている（前掲（注4）刀田（二〇一〇））。このことから、本稿で調査した以外の資料において、「遭」「合」「遘」が主要な表記である可能性も残っている。

＊15 今昔物語集は、巻一から五が天竺部、巻六から一〇が震旦部、巻一一から二〇が本朝仏法部、巻二一（欠巻）から三一が本朝世俗部に分類される。今昔物語集全体を調査してみると、集の前半で「遇」「逢」「遭」「相」が出現するという特徴はあるものの、「逢」「遭」は集全体で各一例、「相」は二例しか使用されていないため、有意差ではないと判断した。

―とだ・えみこ、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期在学―